

長島輪中地域の水害と新田開発の歴史地理

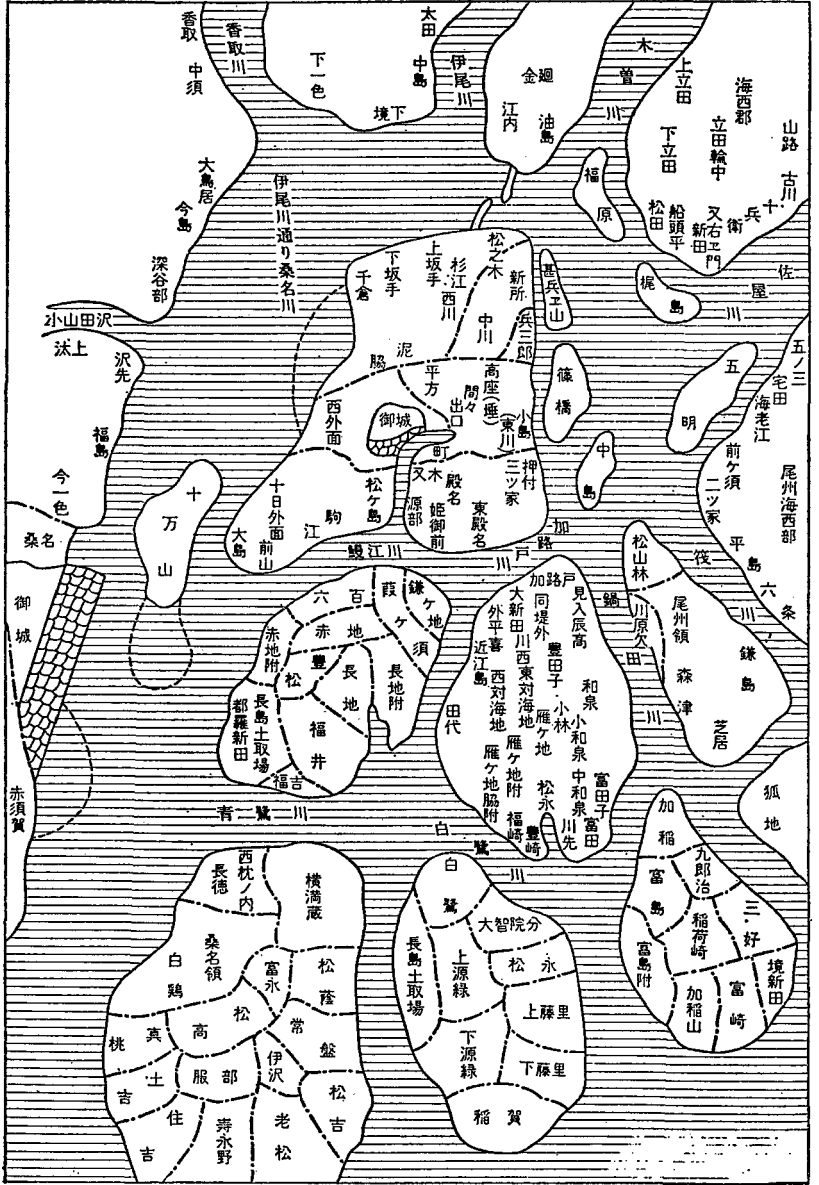
伊藤重信

一、はじめに

長島の地は木曾三川が伊勢湾に入る、河口デルタの水害常習地である。この地域の住民は、常に水に悩まされながら、次々と新田の開発を進めてきた、わが国でも大河川の下流域のみに見る、特殊な地域であるので、ここに新田開発と水害とに相關する農民の姿を、近世までの期間に限って紹介する。明治以降特に有名な伊勢湾台風の被害については、別の機会に譲る。

二、本論

長島地域は一般に輪中地域と言われている。その開発の起源は文献記録に残っていないので不明である。室町末期と推定される古絵図に見られる、木曾川河口最南端の寄州七つの島の地域らしい。この地域がはじめて文献にあらわ



第1図 江戸時代末期の長島付近の図

図で見られる西外面（又木）殿名の線以北が開発され、その南に松ヶ島が開発途上にあつたらしい。この線は長島地域にとっては重要な指標で、この線以北がいわゆるデルタ輪中の地域、以南が江戸時代以後に、伊勢湾奥に次々と生ずる葭山を開発していった、いわゆる海岸干拓輪中と見るべきである。これは村落の集落立地や集落形態——輪中内部の盛土集落水屋の分布、堤防列村などにその差異が認められる。また昭和四三年に国土地理院で発行した土地条件図（二万五千分の一桑名図幅）を見ても、この線以北は三角州、以南は干拓地と分類されている。各部落の開発年代は全く不明である。この部分が長島輪中の本体（本田）をなすものである。織田信長が長島の門徒を攻めた元龜、天正の戦乱のあったのも、長島の形態がこのような姿であつた時である。

江戸時代に入ると、これらの小曲輪が次第に統合され、南に開かれた新田を包み込んで、元和九年（一六二二）に一曲輪にまとめられていった。その後の海岸干拓輪中は、江戸時代以後長島輪中の南および東へ次々と新田開発され、いわゆる零米地帯の新田が、伊勢湾に向かってできていった（第一図参照）。

(一) 長島輪中——長島本田の主体として南から東にかけて、駒江（元和三年——一六一七）野田脇（同四——一八）東殿名（同八年——二二）北出口（元和年間）長十郎起（寛永四年——二七）源部外面（同一二年——三五）姫御前、中島両新田（同一四年——三七）福原（同一五年——三八）千倉出屋敷・善田両新田（同一六年——三九）三郎治（同一七年——四〇）南松ヶ島（正保二年——四五）十日外面・三日両新田（同三年——四六）藤九郎（承応三年——五四）十日付（寛文七年——六七）前山（同八年——六八）遠浅付（延宝二年——七四）などの各新田が、二・三の藩営または町人請負を除いて、ほとんどが農民の手によって開発されている。

この時代までの水害は、別表に見られる通りである。特に長島輪中に大災害を与えたものは、天正十三年（一五八

五)の天西地震の地盤沈下、慶長九年(一六〇四)の大風高波で堤防が破れ、暴潮田圃を害すとあり、寛永四年(一六二七)の二回にわたる大風高波で、西外面仏土に二ヶ所大濤を生ず、慶安三年(一六五〇)の洪水で長島領流失家屋五五二戸、死者一〇三人、天和元年(一六八一)の年四回の大風高波および洪水で、見廻り中の堤奉行および徒付の溺死、百姓の死者無数、別の水害で堤防看守の代官および手代溺死、百姓老若男女二五〇余名溺死、流失九七〇戸などの記録を散見するのみで、詳細は判らない。別に承応三年(一六五四)の旱魃で七・八〇年来の大旱魃米一粒もなし、の記録に奇異を感じる。藩主から度々の金や米の救恤または貸付などはあったが、農民はその復旧再開発、水との闘いに血の出るような苦難の連続であったのである。このような中でも、千倉村その他で小規模な付添新田の開発が続けられていることは、土地にしがみつく農民の根性に頭の下る思いがする。それ以後も、別表のように水害は止むことなく、現在にまで及んでいるのである。

(二) 葎ヶ須輪中——長島輪中が形を整えかけた、寛永年間末頃から、長島輪中の南鰻江川を越えて葎山の干拓開発がはじまった。先ず鎌ヶ地(寛永十六年—一六三九)二五年間において葎ヶ須(寛文四年—六四)豊松(同八年—、六八)六百・赤地・長地の各新田が(同十二年—七二)長地付(寛文年間)福井(元禄六年—九三)が開発された。この葎ヶ須輪中に付添えて都羅(安永五年—一七七六)福吉(宝暦年間)が開発されて、葎ヶ須輪中の形がととのった。これらの新田は尾張知多郡から入植した、農民によって開発されているが、他地の地主・富豪の資金に頼るものが、後期になるほど目立つのが特色である。

輪中が形成される過程中でも、延宝三年(一六七五)の洪水、天和元年(一六八一)の年四回の大風高波、大風雨洪水を伊勢湾の真正面から受け、追打ちのように天和三年(一六八三)の洪水入水、溺死者数十名などの災害を受け

ているが、これまた詳しい記録を欠いている。宝永四〇五年（一七〇七）の宝永大地震により、地盤沈下・津波の被害を受け宝永七年（一七一〇）には加路戸輪中 加稻輪中と共に、幕府の命じた御手伝普請による、築堤復旧もあつたが（この時期この輪中は天領であつた）その後も洪水の外大風高波には、その度毎に伊勢湾から直撃を受けて、水没し大災害を受けているが、被害の詳しい記録は残っていない。その都度農民は再開発・再々開発を繰返し、対幕府の奉行・代官、片や資金集めのため富豪を説き廻る苦勞をしている。故にこの地の新田は、断片的な記録だけでは、開発か再開発かまたは再々開発かが判定し難いところが多い。

(三) 加路戸輪中・見入輪中——加路戸輪中では最北（上流）の加路戸が、室町末期の古絵図に長島の東にすでに唐戸の地名で見られる。古い文献に永祿二年（一五五九）に開発された記録があり（開発か再開発か疑問）北勢四十八家のうちの土豪（国侍）一味が、城砦を構えて居城している。民家八百戸、絹紬布、木綿織を業とする者多しとある。庭訓往来に「尾張八丈（島大布木綿のこと）加路戸より織出す」とあり、付近では繁栄の地で、往来運送も便利であつた。元龜天正の戦乱（織田信長の長島攻め）の際も、長島城の東尾張に対する堡砦の一つとなつた記録もある。その後天正十三年（一五八五）の天西地震のため、土地が湧没して亡所となつた。これらの事件で織染業者は、岐阜などへ分散してしまつた。寛永二年（一六二五）に再開発（再々開発か）された。これに続いて、中加路戸・上加路戸が寛永九十九年（一六三二）に再開発され、大新田（同十五年——三八）外平喜・近江島・西対海地の各新田（承応三年——五四）田代（寛文元年——六一）雁ヶ地（同九年——六九）松永・福崎・太郎地の各新田（元祿四年（九一）豊崎（同十年——九七）と開発されて、加路戸輪中の輪廓ができた。其の後四六年において、雁ヶ地付・同協付・増田が寛保三年（一七四三）小林島（延享四年——四七）の四小新田が添付けられた。この輪中の新田は

初期の長島の農民が開発し、中期は他地よりの移住農民又は豪農が、後期は他地の豪農又は商人資金によって開発された傾向が見られる。

一方見入輪中においては、見入（寛永十五年—一六三八）—一書寛永十四年、辰高寛永正保の頃の（新開）和泉（承応二年—一六五三）東対海地（同三年—，五四）小林（明暦元年—，五五）小和泉（寛文三年—，六三）中和泉（同十二年—，七二）と開発され、八四年間において富田子（宝暦六年—一七五六）が加わっている。開発者の状況は、加路戸輪中と同じような傾向をもっている。

宝暦四年（一七五四）の薩摩藩の御手伝普請で、有名な西濃尾西一帯の宝暦築堤によって、加路戸輪中の潰地の代替地として、見入輪中との間の見入川を同八年（一七五八）に締切り干拓したので、見入輪中は加路戸輪中に吸収されて、一つ輪中になってしまった。その後この輪中の先に川先新田が、文化十年（一八一三）に開発されている。

加路戸輪中は葎ヶ須輪中と、開発の年代・開発の状況は類似しており、同じく天領であった時代が多かった。宝永地震（宝永四・五年）の大津波のあと、葎ヶ須輪中などと共に幕府の御手伝普請で、同七年（一七一〇）の堤防復旧工事が行われている。その他大風高波、河川洪水の災害は、葎ヶ須輪中と全く軌を同じうして、農民は常にその被害・災害復旧に苦しんでいる。

（四）横満蔵・老松輪中

葎ヶ須輪中が開発されてほぼその形態を整えてきた頃、その南青鷺川を越えて横満蔵が、宝暦七年（一七五七）に開発され、単独輪中を形成した。その後約六〇余年間は、この地域に新田開発は見られなかったが、文政年間（概ね一八二〇年代）に横満蔵輪中の南に、更に大きく木曾川水路に張出して老松輪中が開発された。

老松輪中の開発については、正確な記録がないので、その開発年代は明確にできないが、富田氏記および桑名郡志草稿によると「濃州笠松代官松下内匠在陣の時横満蔵新田外十二ヶ村堤防白雞新田まで、三千六百六間三分文政六年より築立て、同十年松下氏検地高受けとなる」とある。この地域は零米以下の地帯で、堤防構築なしには新田開発はできないので、文政六年（一八二三）から開発されたものと思われる。その十二ヶ村は松蔭・老松・松吉・寿永野・真桃・土吉・井沢・常盤・住吉・服部・松高・富永の各新田で、前記文政十年（一八二七）の検地で、石高合計二千四百九十八石二斗四升三合となっている。白雞新田は文政九年（一八二六）に桑名の商人が桑名藩の許可で、旧亡地の古新田の葭山に掛廻堤を築いたと桑名郡志草稿にある所を見ると、先に開発していたものが亡所となり、再開発したものと思われるが、それ以前の記録は全く見当たらないので不明である。この輪中は横満蔵・西枕内長徳・白雞を加えて、十五ヶ村が天保年間（概ね一八三〇年代）に一輪中を形成している。この輪中のうち横満蔵新田は、他地から移住した農民三名により開発されているが、老松輪中の各新田は、西濃の豪農・桑名の商人などの出資によって開発された町人請負新田である。

この輪中は天保六年（一七三五）の大風で堤防が切れ、笠松代官から手当金を受けて川普請、安政元年（一八五四）の安政地震と津波で地盤沈下と破堤、翌年幕府から手当金を受けてまた再普請、安政五年（一八五八）の大風雨で破堤し、また手当金を得て堤防の再々普請をしている。このような地域の新田は、一度破堤して海水が侵入すると、塩分のため二、三年は稲作は収穫が望めないことを知らなければならぬ。この新田に決定的な打撃を与えたのは、万延元年（一八六〇）五月十一日・七月十二日・同十七日の三回連続の大風高波である。これによって老松輪中は破堤潰滅し、全くの亡所となった。しかし農民は堤防の築立に取りかかったが、地主等は追々出資金に疲れて、堤防を原型

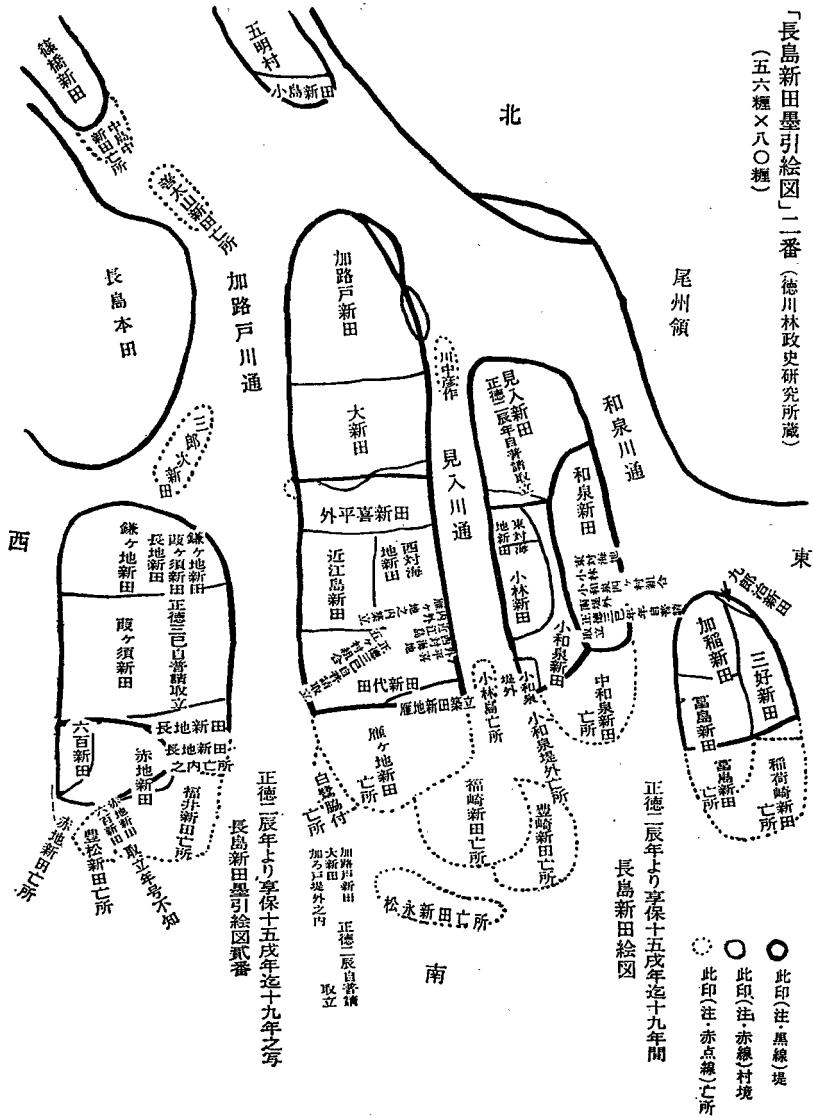
に復することができず、堤防を引下げて横溝蔵輪中堤の外側旧松蔭の残地に、居住地だけの堤防を、僅かな手当金を受けて掛け廻し、文久二年（一八六二）に老松輪中の残存者百余戸が密集居住し、耕地を失った農民は漁業を営み、かたわら遠隔な他の輪中の荒地を開いて、出作りを営むなど細々と生計を立てていた。

彼等が農民として再発足するには、約三〇年後の明治二年（一八八九）の木曾川河川改修工事を持たなければならなかった。この工事によってその居住地が木曾川敷となるため全戸移転、老松輪中の故地に旧地主およびその子孫が先導して、松蔭・白雞の二新田を再開発して、その新田に定着したのである。この地も再開発工事中にさらにその後、数回の大風高波による堤防決壊入水、ことに昭和三四年（一九五九）九月二六日の伊勢湾台風高潮によって、潰滅的な惨害を被った。（松蔭東部落死亡型二四％、流失家屋率九二％）

余談であるが、昭和三七年（一九六二）に偶然にも長島温泉（摂氏六〇〜五〇度）が旧老松輪中服部の故地あたりから湧出し、現在ではこの温泉を中心に観光開発が進み、この地域の農民は農業兼漁業（主として海苔、蛤の海面養殖・養鱧）をして、時代の脚光を浴びて長島町内の最繁栄地・最有福な農村として更生している。

このように南伊勢湾に向って、次々と新輪中が形成されると、葭ヶ須輪中など奥地になった輪中は、大風高波（高潮）の災害は減少するが、一方河川は流路を狭めるので、河川の氾濫洪水の被害が殖える傾向が見られる。

(d) 源祿輪中——加路戸輪中の開発がほぼ終ってその形態を整える頃、その南白鷺川を越えて、白鷺が元祿四年（一六九一）白鷺脇付（正徳二年——一七一一）に開かれているが、これらの新田は正徳四年（一七一四）の大風高波で、加路戸輪中と共に破堤入水し亡所となった。約百年後の文化十三年（一八一六）に再開発したのを手始めとして、上源祿（文政二年——一八一九）・下源祿・上藤里・下藤里の三新田（文政七年——二四）、それに続いて稻賀（開発年代不



第2図 正徳二辰年より享保十五戌迄十九年間「長島新田墨引絵図」

詳)が開発されたが、稲賀新田は間もなく亡所となり、姿を消している。また北部に松永(元祿四年—一七一四)が開発されたが、白鷺と同じく正徳の大風高波で亡所となり、文化四年(一八〇七)に白鷺川敷で二分されて再開発されている。かくして源祿輪中は形成されたが、その開発および水害の状況は、前記横満蔵老松輪中と同じ状況におかれている。この地域の新田開発および水害の状況は、第二図を参照されたい。

(六) 加稻輪中——源祿輪中の東に鍋田川(和泉川)を挟んで、長島領として三好(貞享四年—一六八七)が、尾張領の狐地と同じ年に開発されたのをはじめ、富島(同五年—, 八八)稲荷崎(元祿八年—, 九五)が開発され、その後富島付・稲荷崎飛地・稲吉・富崎の小新田の脇付新田が開発された。また加稻が元祿十五年(一七〇二)に開発されると、その後加稻九郎次・加稻山の小新田が脇付新田の形で開発されている。その後新田開発はしばらく間をおいたが、それらの南に境が文化八年(一八一—)に尾張領の三稻と同じ年に開発されている。更にそれらの南に尾張領の八穂が天保六年(一八三五)に開発されているので、その陸続きの長島領の大野・上野の両新田は、同じ頃に開発されたものと思われる。加稻輪中は上は加稻新田から下は境新田までで、その先に後ほど開かれた八穂・大野・上野の二新田は、現在の鍋田干拓地の故地である。

この地域は次々と海中に堆積される砂州葭生地で、高潮・洪水の度毎に出現又は消滅し或は位置形を替えるなど、地形の変化がはげしく、伊勢と尾張との境界も定かならず、農民が水と闘いながら開発を進めていくので、これらの新田開発期には、尾張藩の農民との間に土地の地先権をめぐる、しばしば紛争を生じ、長島の小藩(二万石)は御三家筆頭の雄藩尾張徳川藩を相手に、苦しい政治折衝をして、まがりなりにも農民の主張を貫き通した記録もある。この時期に決った両国の境界は、加稻輪中の北の鍋田川から筏川に入る川(現在の間崎の地)と三好と狐地の間から

境（両国の境の新田という意）と三稻の間に流れる川の線であった。その後この先に大野・上野・八穂の新田が開かれると、前二者は伊勢の地、後者は尾張の地に属することになっていった。しかしこの三新田は暫時姿を見せただけで、天保六年（一八三五）の大風高波・嘉永三年（一八五〇）の洪水で二度も入水し、安政元年（一八五四）の安政地震の地盤沈下と津波、万延元年（一八六〇）の年三回連続の大風高波と災害の連続で、亡所となり放棄されてしまった。

このようにして開発をすすめた加稻輪中の新田も、明治十二年（一八七九）には愛知県へ編入され、三重と愛知の境界は陸地においては鍋田川の線と決定した。

余談にわたる前記鍋田川の三重愛知の県境も不明確な点が多かったためか、伊勢湾台風復旧工事の一環として、建設省が鍋田川を干拓した時点で、またもや県境問題が発生し、色々と迂路曲折はあったが、昭和四十三年（一九六八）に確定した。また、太平洋戦争後農林省が食糧増産の一環として、旧八穂・大野・上野の三新田の故地に、鍋田干拓事業を始めると、愛知（尾張）三重（伊勢）の県境問題が再燃し、その後この解決策として、源祿輪中の南の稻賀新田の故地などに、木曾岬干拓地を造成したが、ここにもまた両県の境界問題が再々燃しつつある。

以上のようにこの地域の新しい開発は、別表に見られる通り、一七世紀と一八世紀とに集中的に行われているが、一八世紀には僅かな小規模の付添新田のみで、新しい開発の停滞期となっていることに注意を惹く。これは宝永四年（一七〇七）を翌五年の二回に亘る、宝永の大地震で、この地域全般の地盤沈下が最大の原因ではあるまいか。また新しい開発の進行状態を見ると、一輪中ができ上る頃には、川を越えて次の新田の一部が開発され、それを次の輪中新田開発の足がかりとして、開発が進められていく傾向も注意すべき現象と思われる。例えば長島輪中と葎ヶ須輪中と葎ヶ

須輪中の鎌ヶ地新田、葎ヶ須輪中の横満蔵新田、加路戸輪中の加路戸新田、加路戸輪中と源祿輪中の白鷺新田と、全く同じ傾向が見られる。

またこれを開発者の面から見ると、十七世紀前期までは、藩営または地元農民・移住農民が多く、後期になると、地元豪農と町人資本の進出が見られ、十八世紀以後は、外部の豪農又は町人資本による開発が目立つ、これは江戸時代の経済の推移、町人の資本蓄積の進行と、軌を一にするものではあるまいか。

このように農民は水を排除しながら、着々と新田開発を進め、江戸時代末期には、第一図のようになったのである。この間における水害も別表から見られる通り、常に水と闘わなければならない運命におかれ、一度開発した新田も、水害のため亡所となり、再開発・再々開発と、水との闘ぶつごつこが繰返されてきた。この状況は、その一時期のものではあるが、第二図を見れば思い半を過ぎぬものがある。

この地域に次のような事件が起った。農民の姿を知る一例となるので記しておく。

葎ヶ須輪中の豊松新田は寛文八年（一六六八）福井新田は元禄六年（一六九三）に開発された新田で、明治十二年（一八七九）に地統同志で合併して福豊新田となったが、従来から同一行動をとってきた新田である。当時は天領で笠松代官所の支配地であった。開発以来度々大風高波洪水などの水害に苦んできた地域であることは他新田と同様である。

天和元年（一六八一）同三年（一六八三）と数次大風高波・洪水に見舞われ、多数の溺死者・流失家屋を生じている。更に宝永四〜五年（一七〇七〜〇八）の宝永地震で、津波・堤防欠壊・地盤沈下を来し、宝永七年（一七一〇）の幕府による御手伝普請によって、堤防修復が行われるまで二七年間は、生活の途を失って苦しんだ。しかるに翌宝暦

八年九月十六日、またはや大風高波によって堤防は潰滅して、以後この輪中の農民は農地を失い居住場所すらもなく、露命をつなぐにやっとの窮乏の極に置かれた。特に豊松・福井の両新田は地理的に葭ヶ須輪中の南端、伊勢湾への最前線で被害が甚だしかったことは前に記した通りである。

葭ヶ須輪中の農民は、代官所へ新田再築立の嘆願を数度繰返したが取上げられない。農民は更に代表五名で幕府勤定奉行へ直接嘆願に及んだがこれまた取合われない。万策尽きた豊松・福井両新田の農民有志十六人が血盟連判して、享保十年（一七二五）に捨身で直訴を計画した。同年九月老中および代官の伊勢参宮の帰途を待ち受けて、桑名町屋川橋詰で直訴を行った。再三突戻されたが更に屈せず、桑名七里の渡場へ先廻りして、更に同所で直訴を繰返した。農民は必死である。遂に老中はこれを採納した。然し一同は縄を打たれて江戸表へ引立てられて、楊屋入りとなった。中には七〇余歳の老人もいた。老中は上訴の件を幕閣と詮議の、新田再築立の方針を決定した。当時幕府は財政困難で経費の捻出ができない。依て十六名の農民は老中から資金調達の命を受けて帰郷を許されて工事着手の準備と八方手を尽して、各地の富豪に資金調達を依頼して廻った。幸い尾州熱田・名古屋などで七名の富豪の出資に話がつままり、多年の念願が叶ったのである。工事は享保十二年（一七二七）に着手し、翌十三年に竣工したのである。農民はこの間またはや十九年間、生活の手段を失ったまま放置されていたのである。

新開地五七町七反五畝歩、工事費四千三十五両、その入費は反当八両、これを出資者は五両で七分、農民は三両で三分の取得と決めた。農民の出資は労働力の換算である。この配分がこの地に残る七・三配分の慣行となつて、後世におよんでいる。十六名の農民はこの新田の祖霊耕社として、現在に至るまで祭祀を絶やさない。祭日は直訴を敢行した日である。

その後この輪中の水害記録は、安政元年（一八五三）暴風雨洪水二回、万延元年（一八六〇）大風高波三回、慶応年間（一八六六頃）と明治元年（一八六八）深水二回・明治三年（一八七〇）暴風雨洪水・明治十八年（一八八五）深水・明治三二年（一八八九）洪水・明治三九年（一八九六）暴風雨洪水・大正元年（一九一二）暴風雨入水・昭和九年（一九三四）台風稲收穫皆無、地租殆んど免除・昭和三四年（一九五九）台風高潮全村水没死亡率九・五%、流失家屋率二三%水稻、全滅一人や家の損害の少いのは村落の家屋配列の条件による。このように残されているが、これは当輪中の特殊状況ではなく、この地方一般の状況であることを付記する。

当時の輪中堤は農民の資力（時に為政者の手当金や地主の出資はあったが、これらは最小限度の補助金程度）農民の技術・舟や楫・モッコと天秤棒などを用いた人海戦術で構築したものである。その堤防構築用の土砂は、前面伊勢湾の葭山や、時には新田の一部を指定して舟で運んだものである。第一凶の葭ヶ須輪中の都羅新田や、源祿輪中の一部「長島土取場」の標記に注意されたい。全く現在の堤防と比すべくもない。明治大正期までの堤防、各地に残る旧輪中廢堤は、この事実をものがたるものである。唯一の堤防防護策としては、堤腹に竹籬を植えることぐらいしかなかった。故に海面下の零米以下の輪中では、一度破堤したら全くみじめな状況におかれたことは想像を絶するものがある。堤防こそ輪中住民の生命線であり、あらゆる努力と工夫をこらして、団結して護ってきた。

この地域の水害の特性には、次のようなものがある。

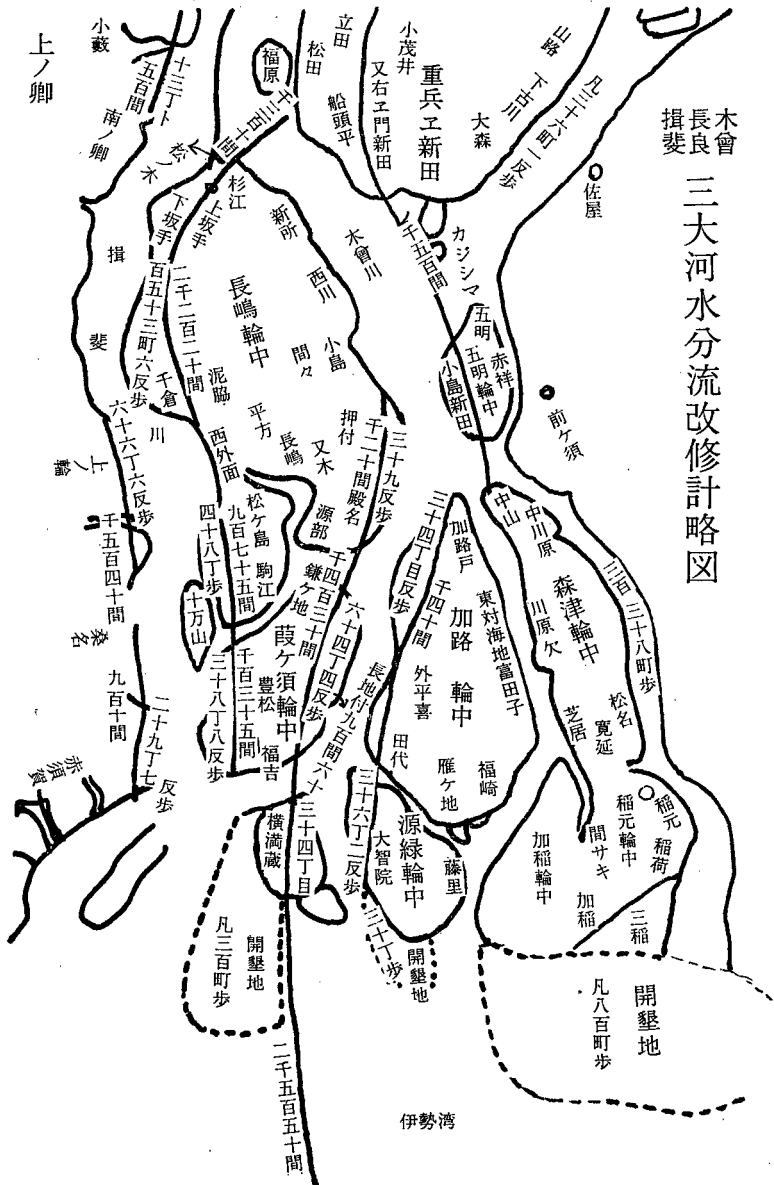
① 河川の氾濫による洪水——これには破堤と樋抜けとがある。現に旧長島輪中の地域だけでも、明治大正期まで輪中堤内側に滞^ひが三二個も残っていた。これは洪水時の落掘で、その洪水の恐ろしさを物語っている。この水害は浸水の深度も高く、家の軒先まで水づかりになることもしばしばあったようである。一度破堤入水したら反対側の輪中堤

を人為的に破り、自然排水を待つより当時としては手段がなかった。従って湛水期間も長く、潮の干満を利用して水が引くまで潮止堤を築くこともならず、被害も大きく随分難儀をしたようである。またこの長期間中に台風又は河川出水があると、水害のダブルパンチを喰うこともしばしばあった。

② 高潮（大風高波）——伊勢湾からの台風などによる高潮・津波の破壊で、これは被害も大きく広範囲に亘る。災害も短時間内に起る現象なので潰滅的な打撃を受ける。時には寛永四年（一六二七）二回、天和元年（一六八一）四回、万延元年（一八六〇）三回のように一年に二回〜四回も来襲を受けることもあり、災害後は老松輪中全域・稲賀新田・大野・上野・八穂各新田のように、開発間もない新田を放棄しなければならない事態も起る。この災害は伊勢湾に直面する地域で、開発の新らしい新田ほど多く、奥地になるほど危険度は減少する。然し伊勢湾台風高潮のように、超大型大規模な災害は記憶に新しいところである。

③ 長雨集中豪雨による内水害——長期間の河川出水により樋による自然排水不能のため、長期間の湛水深水によって起る現象で、当時は排水機とてなく、樋による自然排水を待つより外手段はなかった。この現象は外河川が天井川化し、また下流に無計画な新田開発が進み、河川流水が円滑を欠くようになる同一層その被害を増大する。この災害は零米以下の低平な輪中地域における、特殊災害と見てよからう。人的損害は前二者に比して少いが、農業で生活している農民にとっては、農作物の水腐れ収穫皆無が何よりも打撃で、堤防上に小屋掛けをして住い、草根木皮を食して露命をつないたとの記鉄も散見する。しかし、人命の損害が少いためか、余り記録に残されていないようである。

当時としては現代のように、気象通報・警戒措置も未だ発達せず、ただ観天望氣に頼る時代、このような環境の中



第3図 木曾・長良・揖斐三大河水分流改修計略全図

えどうしたらよいのかと大声で叫びたい衝動にかられる。

古来この地域の農民は、宿命的に度々このような災害に会っているので、農民が血と涙であがなった生活の知恵から、水屋と共に小輪中の細胞的防衛のための、旧輪中廃堤を不便をしのびまた避難場所として残して来たが、戦後の車社会に不便だ、道路拡張のためだと目前の理由だけで、これらの旧輪中廃堤を取払った。そのため伊勢湾台風高潮で、その酬いをいやと言うほど思い知らされた。このような大災害が別表だけから見ても、災害の山が10年〜20年ぐらいに繰返されている。災害は特に南部の干拓新田に甚だしく、また大地震後に大災害が目立つのも、気候もさることながら、地盤沈下と災害復旧のおくれによるものではあるまいか。

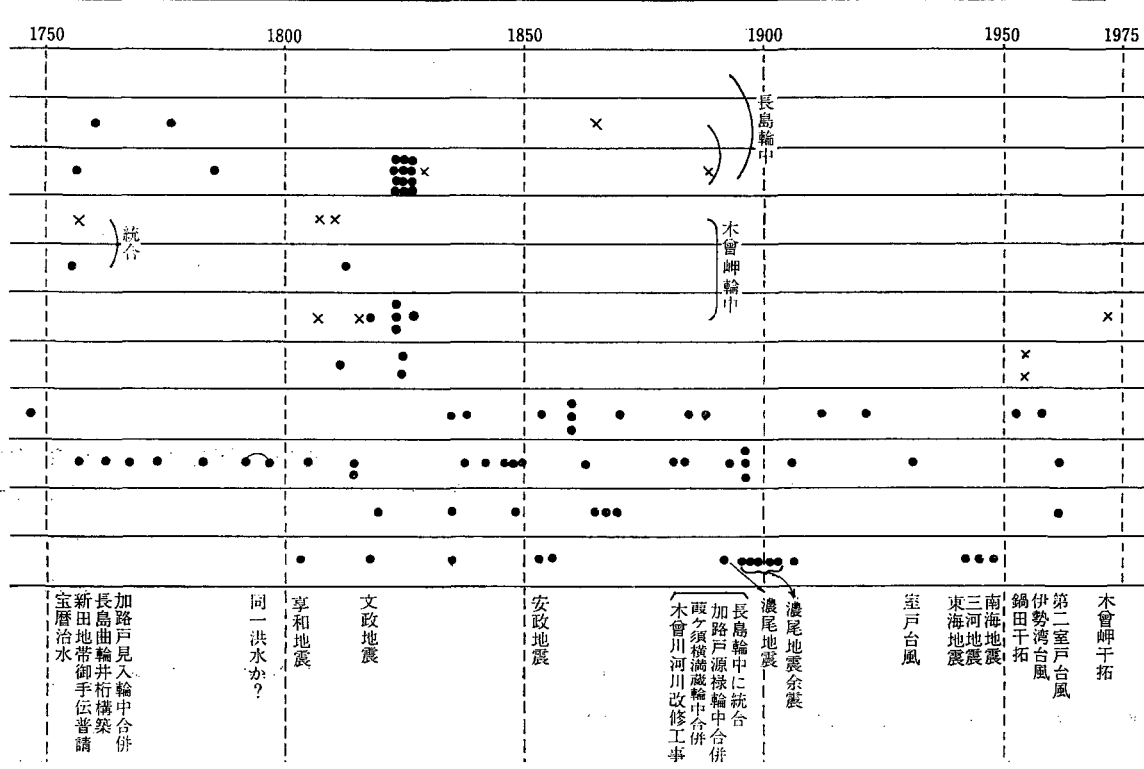
有名な宝暦四年（一七五四）の宝暦治水も長島輪中地域には、別表から見られる通り、その恩恵に浴することもできず、この地域の水害が軽減されてきたのは、ヨハネス・デ・レーケの設計により政府が実施した明治20年〜大正元年（一八八七〜一九一二）の木曾川河川改修工事をまたなければならなかった。―当地域は明治三三年頃までには完了、この工事により長島輪中の姿が現在のように全く改まり、第三図で見られる通り、江戸時代までの姿を全くとどめない姿になった。また古くから「十年一穫」と言われた、この地域の農業生産が安定したことは、大なる恩恵である。その後は木曾三川は一級河川として、建設省木曾川下流事務所が、絶えず手を加えている。

三、結 び

長島輪中地域は水に恵まれ、ほとんど旱魃を知らない。その反面常に水害に悩まされ苦められ、また日常の飲料水用水などにも事欠いてきた。すなわち「水に恵まれながら水に悩む長島」水に対する考慮なしには、一日も生活でき

		年 代 (西 曆)		1550		1600		1650		1700		
		新 田 開 発	長島輪中	長島本田七曲輪 (鎌倉～室町前期に開発)						●●●●●●●●		●●
葭ヶ須輪中					●		●●●●●●●●		● × ×			
横満蔵老松輪中												
加路戸輪中	× × (加路戸新田の再開発)		× × × ×		●●●●●●●●		●●●●●●●●		× ●●●●●●●●			
見入輪中			●●		●●●●●●●●		●●●●●●●●					
源祿輪中							●●●●●●●●		●●●●●●●●			
加稲輪中							●●●●●●●●		●●●●●●●●			
災 害	大風高波 (台風高潮)		● (3)		●●●●●●●●		●●●●●●●●		●●●●●●●●		●●●●●●●●	
	河川氾濫 (洪水)		● (4)		●●●●●●●●		●●●●●●●●		●●●●●●●●		●●●●●●●●	
	内陸湛水 (深 水)						×					
	地 震 (震度 5以上)	●		●		●				●●●●●●●●		
備 考	(新田開発) ● 開発 ● 年代判明のもの ● 及推定できるもの × 再開発 ● 記録にあるもの のみ		天正地震		慶長地震		長島を鑑留一由輪とする		× 大旱ばつ 寛文地震		宝永大地震	

新田開発・水害年次一覧表



ない地域である。

また近年上中流部のダム建設、愛知用水などの取水、工場排水などによる流量減少と汚染、それに一帯の地盤沈下のため塩害に対する悩みと環境汚染がその上に加わる地域となってしまった。

参考文献

- (1) 伊藤重信著 長島町誌上巻(昭和四十九年発行)
- (2) 伊藤重信作製長島町誌下巻草稿